

レポーティングに 関する4つの主な課題 (課題を確実に克服する方法)

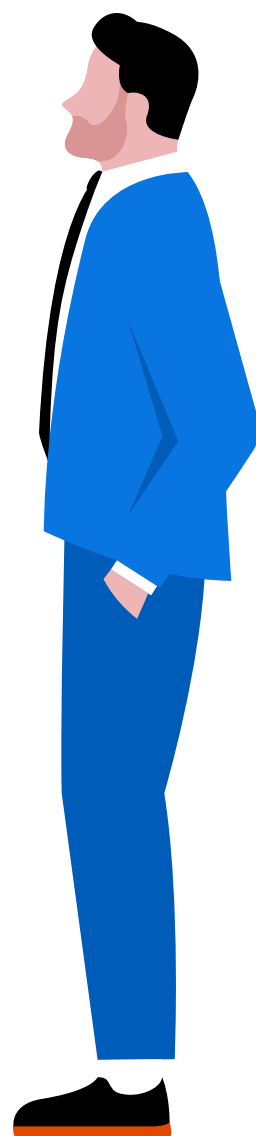


企業のレポーティングが 大きな課題である理由

企業レポートの作成に追われている人が多いのではないのでしょうか。取締役会や経営幹部などがビジネスに関するインサイトを得られるよう、必要な数字を早く提示しなければならないのに、確認すべき情報量の多さに圧倒されていませんか。しかも財務部門が利用できるデータの量は、近年急激に増加しています。それにもかかわらず、財務データと財務以外のデータを組み合わせ、組織のすべてのリーダーが簡単に傾向を把握できるように、タイムリーで正確かつ統合された、わかりやすいレポートを作成することがいまだにとっても難しいのはなぜなのでしょう。

レポーティングに関する [Workday の調査](#) によれば、調査対象企業の会計および財務報告部門のうち、ステークホルダーのニーズを効果的に満たしていると考えているのはわずか 46% に留まっています。なぜこれほど評価が低いのでしょうか。そして、この問題を解決するために何ができるのでしょうか。この電子書籍では、財務レポートに関する 4 つの一般的な課題と、それに対処するために何ができるのかについてご紹介します。

内容をお読みいただき、課題を確実に克服する方法をご覧ください。



影響

何もしないことのリスク

現在、ほとんどの企業は、自社の財務レポートが本来あるべき姿からずれていると自覚しつつも、その多くは問題を是正するための対策に手間取っています。理由はさまざまですが、主なものとしては、改善が非常に困難であり、そのために割ける時間がほとんどないと感じているという点です。

しかし、財務レポートの改善を後回しにすれば、ビジネスがリスクにさらされることとなります。財務部門にとっては、バックミラーを見ること、つまり過去の出来事に基づいてプランニングする静的アプローチを取るよりも、フロントガラスから外を見て、未来を予測する方がはるかに有意義です。正確な過去の情報を入手しようと走り回っている間に、競合他社が新たな市場機会を見出す可能性もあります。

アクティブ プランニングは仕事の進め方を変えるだけではありません。組織全体で財務部門に対する見方を変え、ビジネス パートナーとの関係を強化し、財務計画と分析 (FP&A) 部門にリーダーシップと指導的役割を持たせる可能性を秘めています。つまり、財務部門は付加価値の高いインテリジェンス プロバイダとして、取締役会や各事業部門が十分な情報に基づく意思決定を行う上で頼りにされる存在となります。



“

以前は Excel でレポートを作成するのが苦痛でした。Workday Adaptive Planning を導入したことで、時間の使い方が一変しました。統合やエラー修正にかかる時間が減り、分析に集中できるようになったのです。数字への自信も以前よりはるかに高まりました。

CFO、Tom Shaw 氏
Papyrus 社

レポーティングの課題 1:

精度の検証

Excel は優れたツールです。しかし、**スプレッドシート**は静的であることから、常に最新の状態を保つには財務レポートを絶えず作成しなければならず、スピードと精度が損なわれます。また、スプレッドシートはレビューや検証で閲覧される際にバージョン管理の問題が発生し、効率性とセキュリティも損なわれます。

ユーザーが1人で管理するスプレッドシートであっても、一元化されたレポーティングシステムがなければ、メトリック、データ、計算の不整合の件数が増え、財務部門はデータの検証と確認に貴重な時間を費やさざるをえなくなります。このような状況では特に、軌道修正を行うために必要な**差異**レポートや比較レポートの作成が難しくなります。

CFOの進化する役割に関する Workday のレポートによると、13%の CFO が財務部門をシェアード サービス モデルに移行する予定であると回答しています。時間とリソースを節約してエラーを減らすために、財務プロセスを自動化して、1つの部門で一元的に管理する方向に移行する傾向が続いています。CFO はデータ収集を自動化することで、データの信頼度を高めつつ、価値あるインサイトを容易に見いだせるようになります。

レポーティングの課題 2:

複数システム間でのデータの扱い

財務担当者には、明確でアクション可能な財務データを生成する責任があります。企業の意思決定者は、データに基づく分析だけでなく、その分析に基づいて取るべきアクションについても理解できなければなりません。

しかし、たった1つのデータが欠けているだけで、ステークホルダーが必要としているインサイトの妨げとなる可能性があります。また、**財務以外のメトリック**を追跡する組織が増えたことで、企業レポートに含まれる業務データの量も増加しています。財務部門以外で管理されることが多いこのような情報に従来のレポーティング手法でアクセスしたり取り込んだりすると、さらに負担が多くなります。何時間あるいは何日もかけてデータを探し出し、その精度と一貫性を確認し、財務担当者以外でも理解できるようにレポートの体裁を整えることは、FP&A 部門の生産性の低下につながります。

分散した各種データの収集と操作に関わる手順が増えるほど、効率と精度が損なわれる可能性が高くなります。**ミスが発生しやすく時間がかかる手動のデータ収集**ではなおさらです。**企業レポート作成の課題に関する Workday の調査**でも、最も改善が必要なレポーティング プロセスとしてデータ収集が挙げられており(32%)、それに次いで多かったのはデータの精度の検証(21%)となっています。この結果は、**サイロの解消に関する Workday のレポート**と一致しています。このレポートでは、いまだに 47% の CFO が分散した各種システムから手動でデータ収集を行っていることが明らかになりました。

これに対し、業務データと財務データを一元化されたひとつのリポジトリに統合すれば、レポーティングにかかる時間を大幅に削減し、精度を高めることができます。唯一の正しい情報源があれば、財務部門では説明責任や精度に関する議論ではなく、インサイトとアクションに関する話に再び集中できるようになります。

レポートニングの課題 3:

コラボレーションの欠如

財務レポートは、財務部門とそれ以外の部門のマネージャが協力して、数字を報告するだけでなく、その数字からインサイトを引き出して行動へとつなげる共同プロセスであるべきです。しかし、業務マネージャは往々にして**ファイナンシャルプランニングプロセス**に関する十分な情報や主導権を持っておらず、自らの意思決定が企業全体の採算性にどのような影響を与える可能性があるかについて教育を受けていません。一方、財務部門はパフォーマンスに関する真のインサイトを提供できず、マネージャは結果を改善する機会を失っています。なぜなら、静的なレポートニングツールでは、ステークホルダーのコラボレーションを実現できないからです。

コミュニケーションと**コラボレーション**はレポートニングにおける普遍的な課題であり、差異分析においては特に顕著です。次のような状況に心当たりはありませんか。あるレポートで差異が見つかり、そのレポートはレビューのためにEメールで送信されます。すると、差異に関するさまざまな質問と変更依頼が必然的に発生し、結局のところ答えを得るために実務に近い担当者にレポートが転送されることになるのです。もし差異に関する説明が最初のレポートに含まれていたなら、それは真のコラボレーションと言えたでしょう。

コラボレーションを実現するには、財務部門以外のマネージャもレポートへのアクセスと変更を行えるようにする必要があります。そうでないと、大きな混乱の原因となる土壇場での更新を招き、複数に及ぶレポートの相次ぐ再チェックと検証を引き起こすこととなります。このことから、**4分の3近いCFOがコラボレーションを最も重要な取り組みとして位置付けた**ことは驚くにあたりません。財務部門にはコラボレーションツールが必要です。これが、コラボレーションのサポートと制御を行い、レポートニングプロセスにおける企業全体のエンゲージメントと説明責任を向上させます。

スプレッドシート

59%

サマリレポート

17%

図表を含むレポート

16%

文字のみのレポート

7%

その他

2%

図 1: 財務部門が提供する主なレポートの形式

(出典: Adaptive Insights、『CFO Indicator Q4 2016 – Piece by Piece: The Challenges in Assembling Corporate Reports』)

レポートニングの課題 4:

データの解釈

データを収集したら、今度は財務および業務に関するインサイトを明確に説明できるように、そのデータを分析して解釈する必要があります。数字の背後にあるストーリーをもっと理解できるようになれば、[データドリブンな組織](#)として機能できるようになる可能性が高まり、主要なステークホルダーにメッセージをより効果的に伝えられるようになります。

というのも、財務部門以外の担当者はデータを視覚的に利用する傾向があるからです。彼らが求めているのは数字だけではありません。提示されるデータの影響や、それが何を示唆するのかを理解したいと考えています。[コラボレーティブな財務部門に関する Workday のレポート](#)によれば、来年度にデータ可視化戦略を策定しようとしている CFO は全体の 53% に上りました。

適切な意図に基づいて適切な行動を起こしたいと考えている人々に対しては、直感的な[ダッシュボード](#)とデータの可視化によって、現在のパフォーマンス、将来の傾向、可能性のあるシナリオを明確に示すストーリーを構築するのが有効です。理想を言えば、財務担当者がステークホルダーの求めに応じてさまざまな形式ですばやく簡単にデータを提供できる柔軟性の高いダッシュボードを選択すべきです。

課題の答え

レポートに関するこれまでの課題を克服するには、従来の不十分な情報アクセスと財務レポートの限界を乗り越える必要があります。

スプレッドシートよりも高度な何かが必要ですが、それはデプロイに6か月もかかり、IT部門の多大な労力が必要となるような過剰なものであってもなりません。

ビジネスパフォーマンスの改善を促し、成長を加速する財務インテリジェンスをもたらすソリューションを選択すべきです。また、そのソリューションは財務部門によるアクティブプランニングを実現するものでなければなりません。つまり、財務部門がトランザクションに関する静的なバックオフィスタスクという定型業務に留まらず、リーダーシップや指導的役割へと移行できるようにするものです。

簡単に言うと、必要なのは以下のような企業パフォーマンス管理 (CPM) ソリューションです。

- 唯一の正しい情報源を提供する
- データ収集を自動化する
- コラボレーション文化を実現する
- 視覚的なストーリーを提供する



ソリューション1

唯一の正しい情報源

唯一の正しい情報源により分散した各種システムやスプレッドシートの使用から脱し、精度を高めることができます。企業全体で共通の業務データと財務データのコアセットを持つことで、可視性が高まり、パフォーマンスに関する一貫したコミュニケーションを促進できます。唯一の正しい情報源を利用することで、財務部門はデータをすばやく収集し、スプレッドシートが次々と増えていくのを防ぎ、意思決定を加速し、データ インサイトに集中することができます。つまり、**唯一の正しい情報源**は財務部門がレポートにかけける時間を節約できるだけでなく、鋭いインサイトを生み出し、組織内の連携を促すのにも役立ちます。

ソリューション2

データ収集の自動化

複数のデータソースをまたぐデータ収集を自動化すれば、スプレッドシートをインポートする場合でも、クラウドベースやオンプレミスのアプリケーションからデータを直接統合する場合でも、時間の節約と精度の向上を実現できます。**レポート**を自動化し、唯一の正しい情報源を使うことで、財務部門はすべてのステークホルダーの求めに応じて、タイムリーで高品質なレポートを提供できます。自動化では、基準、ロジック、ガバナンスが組み込まれ、再現可能になることで、一貫性が向上し、検証時間が短縮されます。これにより、財務担当者はただデータを収集するのではなく、データの分析に多くの時間を費やせるようになります。最終的に、自動化は全体像を把握して、考えられる問題や機会をより迅速かつ明確に捉えるのに役立ちます。また、一度サイロ化されたデータを他の情報に簡単に統合することができ、その後、財務担当者やそれ以外のユーザーは、セルフサービス データ プラットフォームを通じてそのデータにアクセスできるようになります。



ソリューション 3

コラボレーションの文化

業務部門との緊密なコラボレーションによって、意思決定を効果的にサポートし、パフォーマンスの改善を促進できます。これにより、財務部門は計算するだけの裏方ではなく、真のビジネス パートナーになることができます。

真のコラボレーションを実現するには、データや計算式を更新するたびに監査証跡を作成することで説明責任を向上させるレポート ソリューションが必要です。また、財務部門には、マネージャを関与させ、彼らが必要とする関連情報をすばやく提供する CPM システムも必要です。

この目標を達成するために、適正な価値を提供することなく貴重な時間とお金を消費する複雑な IT システムに投資する必要はありません。代わりに、クラウドベース テクノロジーを使用した専用のシステムを実装します。このシステムでは、あらゆるレベルで自動集計されるドライバベースの予測に対して無制限の数のマネージャが協力してアクションを取れるようになります。また、ビジネス ユーザーにセルフサービスのプラットフォームを提供すれば、ユーザーが自分自身でレポートを取得できるようになり、財務部門は月次レポートを手動で作成するという負担から解放されます。

ソリューション 4

視覚的なストーリー

視覚的に説得力のあるダッシュボードがあれば、財務部門はストーリー全体を伝えることができ、財務レポート プロセスに付加価値を加えることができます。ダッシュボードは、過度に詳細なレポートや過度なデータ ダウンロードの罍を回避し、代わりにコンテキストと明瞭さをもたらすようにデータをわかりやすく表示します。視覚的表現に優れた見やすい形式でデータが表示されるので、従来のデータでは見過ごされていたかもしれない課題や機会をすばやく見つけることができます。財務部門は、週次レポートや月次レポートだけに頼るのではなく、傾向や移動平均といった形でまとめた財務結果を迅速にフィードバックするダッシュボードを作成できます。また、表面化しつつある問題について対策を講じる必要があるときには、KPI によってマネージャは早い段階で注意を払うことが可能です。

財務レポートの簡素化

財務部門がビジネスを効果的に管理

時代遅れのテクノロジーでは、財務部門が価値の低いタスクに埋もれてしまい、ビジネスに真の価値を加える妨げとなってしまいます。逆に、Workday Adaptive Planning のような最新のクラウド財務ソリューションでは、アクティブ プランニングとレポートングにより、財務部門はビジネスを効果的に管理できるようになります。

Workday Adaptive Planning を利用することで、以下を実現できます。

- **精度の向上:** 財務のレポートング、プランニング、業務メトリックを最新のクラウド財務ソフトウェア ソリューションに統合することで、唯一の正しい情報源を提供します。これにより、組織内の誰もが、詳細なレポートから統合されたレポートまで、あらゆるレポートにアクセスして更新し、必要なときに必要な情報をドリルダウンできるようになります。個々のエラーに的を絞るのではなく、物事を全体的に捉え、レポートングのエラーを未然に防ぐことができるわかりやすいソリューションを利用できます。
- **手動のデータ収集の廃止:** すべての財務データをクラウド上で利用できるようにすることで、手動による面倒な収集作業をなくします。これにより、財務部門が時間をかけてデータを探す必要がなくなり、戦略的な分析や指示に集中できるようになるだけでなく、レポートが常に最新の状態に維持されます。データを一元化し、付加価値のないタスクを自動化することで、財務部門はレポートング機能を強化し、よりの確な意思決定を実現にするために必要な分析を経営幹部に提供できます。
- **コラボレーションの強化:** メトリックやレポートングを関連するコメントと組み合わせます。これにより、実際のパフォーマンスと期待されるパフォーマンスを簡単に比較し、差異を説明するコメントを追加できます。また、セルフサービス レポートングを利用することでビジネス マネージャのエンゲージメントをさらに強化し、彼らが必要とするデータを可視化できるようになります。マネージャは新しいレポートの作成を依頼しなくても、自分自身でレポートを作成できます。財務部門がパートナーとして関与することで、全員がメリットを得られます。
- **データの解釈:** カスタマイズしたレポートとダッシュボードを作成して組織内で共有することで、視覚的に説得力のある最新のストーリーを提供できます。レポートングにおいては、コメントとストーリーの強化がますます必要になっています。ステークホルダーは正確な報告を求めているだけでなく、その数字がビジネスについて何を語っているのかを理解したいと考えているのです。データが視覚的に提示されれば、その中にある傾向とストーリーを見抜けるようになります。

行動を起こす準備はできていますか。Workday は貴社がレポートングに関する課題を克服できるようサポートいたします。

Workday は新世代のエンタープライズ プランニングとアナリティクスのソリューションを強化しています。Workday Adaptive Planning は、急激な変貌を遂げる世界で組織のアジリティを高め、社員が連携し、インサイトを得て、的確な意思決定を迅速に行えるようサポートいたします。強力なモデリングと分析機能はどのような規模の組織でも威力を発揮し、だれでも簡単にプランニングができます。Workday のクラウド アプリケーションならば、組織の大きさに関わらず、事業の環境が変化しても自信を持って迅速に対応できるようになります。詳しくは、adaptiveplanning.com をご覧ください。

お問い合わせやデモをご覧になるには workday.co.jp にアクセスしてください。



ワークデイ株式会社 | 代表 : +81-3-4572-1200 | workday.co.jp

©2020. Workday, Inc. All rights reserved. Workday および Workday のロゴは Workday, Inc. の登録商標です。その他のすべてのブランドおよび製品名は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。all-pl-wp-top-4-reporting-challenges-ja.pdf